

# 日本の神がみ

鈴木貞美

日本の神がみは面白い。これほど数奇な運命をたどった神がみは、世界にも、そうはいないのではないか。まず数が多い。『日本書紀』は高天原に八百万の神がいるという。そのほとんどに名前が与えられていない。しかも、彼らは死ぬらしい。『古事記』では、イザナミが火の神、カグツチを生み、焦げてしまったのを「かむさり神避」といつている。が、イザナミはよみのくに黄泉国、死の国に住んでいるので、これは死んだといえるかどうか。『日本書紀』巻二で、タカミムスヒがあしはらなかつくに葦原中国に遣わしたアメノワカヒコは、命令を実行しなかったため、タカミムスヒの投げた矢に当たって死ぬ。ギリシア神話の神がみは死なないことになっているので、だいぶ性格がちがう。

最も位の高い神に「尊」、次に「命」を用いると『古事記』には書かれている。「命」は、もと中国語で天の命令のこと。それが日本では「詔」をみかど発する帝に用いられ、神の尊称にもなった。「命」は、人の「いのち」

の意味にも転じるが、天武朝のころのことらしい。

『常盤国風土記』<sup>ひたちのくにふどき</sup>には、天から里の近くに下りた神が、人びとの排泄行為を無礼として懲らしめるので、頼んで山に鎮まってもらったという話が遺されている。人間にとって迷惑な神さまに山にこもってもらったのである。お願いされると人間のいうとおりにする神さまも珍しい。

一言主<sup>ひとことぬし</sup>という神がいる。「悪事も一言、善事も一言、言いはなつ」と『古事記』下巻に出てくる。ことばの力で恐れられていた神にちがいないが、時代が下るにつれて、賀茂神社に使われる神とされ、陰陽道で、人の善悪を見抜くために用いられる<sup>しき</sup>式（識）<sup>がみ</sup>神に近くなる。古代の仏教説話集『日本霊異記』では、<sup>えんのぎようじや</sup>役行者という仏教者のライヴァルにされている。仏教が盛んになると、民間に信じられている神がみは邪見に扱われることもあったらしい。

だが、平安時代にはインドの仏が日本では神となって現れるという考えが盛んになる。本地垂迹<sup>ほんちすいじゃく</sup>、権現思想<sup>ごんげん</sup>という。たとえば熊野権現は三神が祀られているが、それぞれ如来や観音の化身<sup>けしん</sup>とされる。こうして神仏習合が進む。

外国から訪れる神もいよいよ活躍する。室町時代の末ころから民間にひろまったとされる七福神のうち、日本に由来するのは恵比寿さまだけで、大黒天、毘沙門天、弁才天（弁財天）は、もとヒンドゥー教の神がみが、仏教にとりいられるなどして伝わったもの。福祿寿は中国の民間信仰の道教の神、布袋さまは、中国・唐の末期の仏教僧がモデルという具合

で、なかなか多彩である。

御霊信仰もある。人々を脅かす天災や疫病の発生を、怨みを持って死んだ人間の「怨霊」のしわざとして恐れ、これを鎮めて「御霊」として祀り、祟りを免れ、幸いをもたらしてくれるように願うもの。平安中期に陰謀により、左遷されたまま歿した菅原道真すがわらみちざねを祀る天神さまがよく知られる。道真歿後に宮廷に落雷があり、また禍が続いたことから雷神と結びつけられた。道真が和漢の学問に選れていたことから、のちに学問の神さまとされ、今日でも親しまれている。祟りとは関係なく、崇拝を集めた人の霊を神として祀ることも行われた。江戸幕府を築いた徳川家康は、日光東照宮に祀られ、東照大権現と呼ばれた。

江戸時代には、神道、儒学、仏教のおおもとはひとつという考えがひろまり、神道のアマテラスオオミカミ、儒学の天、仏教の大日如来を一緒にして太陽を拝む習慣も民間にかなりの勢いをもった。太陽の恵みに感謝し、崇拝することは世界各地にあったろうが、あらためてひとつにまとめられたのである。月を神とあがめる習慣も古くからあり、中国の節句の風習が伝わり、「月見」として長く定着している。人びとは山の神、川の神など自然神を信仰し、火のもとの竈や便所にいたるまで神を祀って大切にしていた。謡曲「江口」などから遊女が凡夫を救う観音に見立てられもする。こうして、さまざまな由来をもつさまざまな神さまが、一緒のものとなされたり、ときには争いを演じたりしながら、人びとが暮らしを守り、幸いを祈る、よすがにされてきたのである。

幕末維新期に西洋から訪れた西洋人は、それらに彼らが植民地であらう「原始信仰」に似たものを感じたろうが、ちがうところもかなりあった。中世に日本に訪れた宣教師たちは、阿弥陀仏を絶対神のように信仰する一向宗など、キリスト教に近いものという考えももったらしい。が、江戸時代のうちに神社は村の結束の場とされ、各家は寺の檀家に位置づけられ、草葉の陰から子孫を見守ってくれる村や家の祖先崇拜がすっかり定着し、家の祖先の霊を迎えるお盆も仏教と結びついて毎年の行事になっていた。

幕末維新期には、日本を「神の国」とする考えがにわかに高まり、廃仏毀釈も各地に起こった。が、長く神仏習合が続いてきたので、これは挫折した。政府は神社を国家管理とし、それまでお寺の姿をしていたところが神社に衣替えし、村の神社の統廃合も進む。啓蒙主義者たちは迷信の撲滅を唱え、仏教にも近代化の波が押し寄せ、体制を整えてゆく。二〇世紀に入るところから、長く民衆に親しまれてきた日本の神がみにとって受難の時代が始まることになる。そして、本格的な研究もはじめられた。